



シリーズ しまねの遺跡 発掘調査パンフレット13

松江城下町遺跡 白潟地区

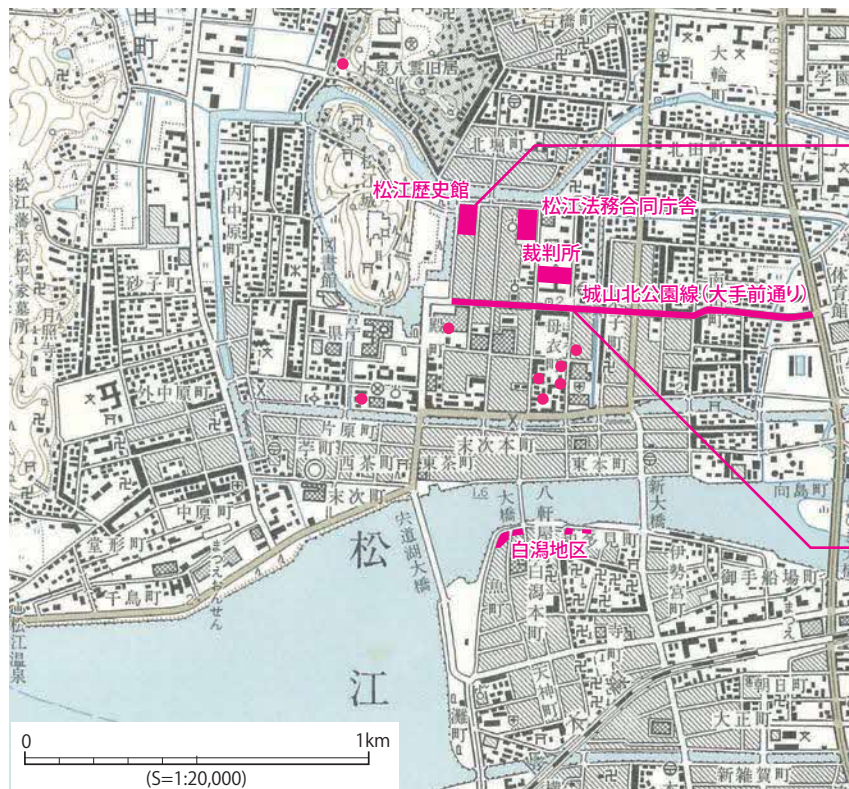
— 中世の港町から近世城下町へ —



調査が進む松江城下町遺跡

島根県教育庁埋蔵文化財調査センターでは、令和3年度から斐伊川水系大橋川河川改修にともない松江市魚町・白潟本町・八軒屋町・和多見町内で松江城下町遺跡白潟地区の発掘調査をおこなっています。

松江城下町遺跡については、これまでに大橋川よりも北側の地域で数多くの発掘調査がおこなわれ、江戸時代の武家屋敷の様子や城下町の形成過程などが解明されてきました。一方、大橋川の南側の地域ではほとんど発掘調査がおこなわれておらず、城下町に関する考古学的な知見は得られていませんでした。しかし、この度の発掘調査によって中世から江戸時代の遺構・遺物が確認され、中世の港町から近世城下町への展開が明らかになりつつあります。これまでにわかった最新の成果を紹介します。

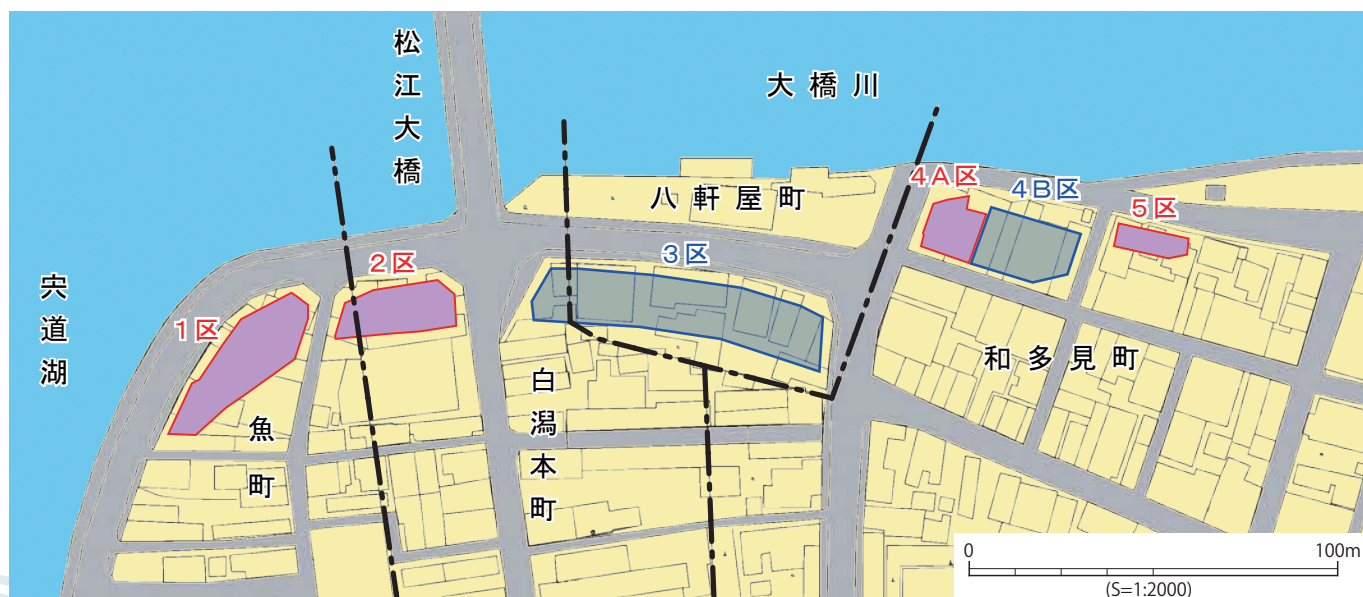


松江歴史館で発掘された重臣屋敷跡
(写真：松江市提供)



城下町造成前の地層から見つかった水田跡
(写真：松江市提供)

松江城下町遺跡の主な発掘調査箇所
(国土地理院地図・松江 1:25,000をもとに作成)



松江城下町遺跡白潟地区の発掘調査区配置図 (赤…発掘調査実施箇所、青…未調査箇所)

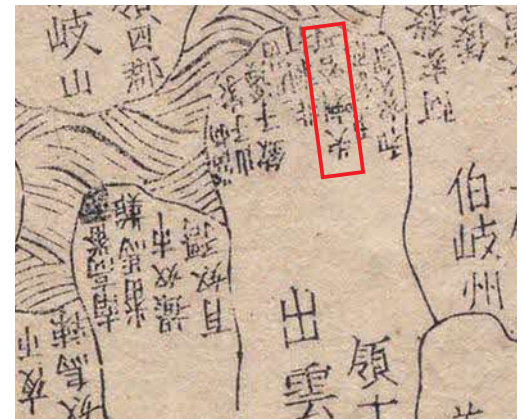
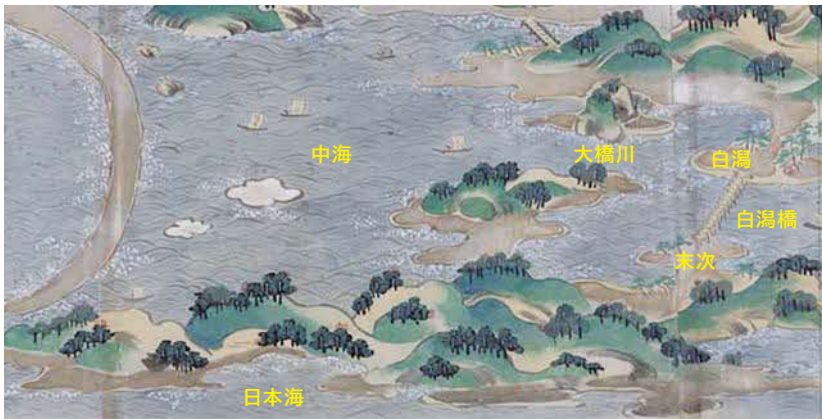
※この地図は島根県知事の承認を得て、松江県都市計画図(1/2,500)を使用し複製したものです。(承認番号 令和5年9月22日 都第229号)

白潟地区の概要

白潟地区は、宍道湖から中海へ注ぐ大橋川の南岸にある微高地上に位置しています。この微高地は、「白潟砂州」と呼ばれる南北方向にのびる砂州で構成されています。

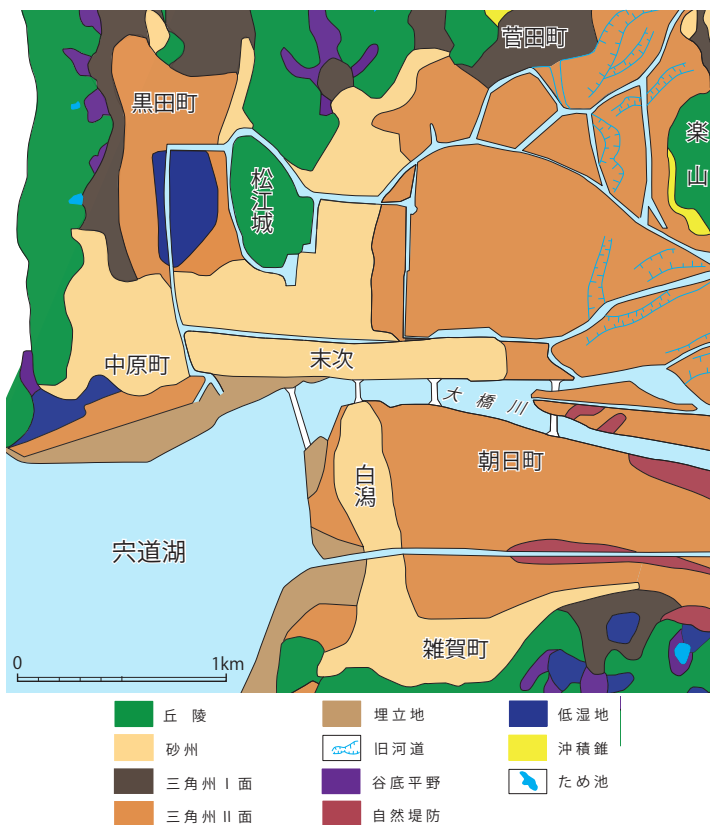
「白潟」という地名が文献史料で見られるようになったのは南北朝時代からで、このころから大橋川北岸とをつなぐ「白潟橋」の存在が記されています。室町時代から戦国時代には大橋川北岸の末次とともに町場が形成され、中国の明代の地理書『籌海図編』に「失喇哈打」と記載されるなど水運の要衝として知られていました。

江戸時代になると、新たに出雲国を治めた堀尾氏は1607年から1611年にかけて松江城を築城し、城下町を建設しました。中世以来の町場であった末次や白潟は城下町に取り込まれ、町人地として発展しました。特に白潟は大橋川を行き来する舟荷の点検や、積み替えをする渡海場が置かれ、松江藩の経済の中心地として栄えました。



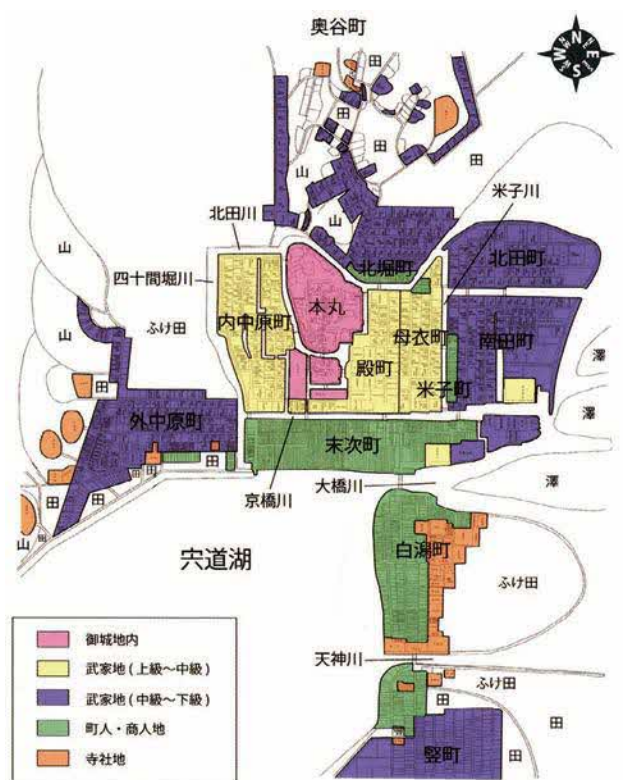
「大山寺縁起絵巻 (模本)」(東京国立博物館蔵、原本成立1398年) Image : TNM Image Archives

『籌海図編』(国立公文書館アーカイブより)



松江平野周辺の微地形 (林1991をもとに作成)

大橋川南岸には南北方向にのびる「白潟砂州」、大橋川北岸には東西方向にのびる「末次砂州」があり、中世の町が展開していました。松江城は松江平野北側の丘陵の亀田山に築かれ、周辺の低地を埋め立てて新たに城下町が造られました。



松江城下町における居住区分 (松江市ほか2018)

「堀尾期松江城下町絵図」(1628～1633年成立)をもとにした図面です。城の近くには上・中級武士の屋敷地、その外側には中・下級武士の屋敷地があり、末次や白潟には町人地や寺社地が展開しています。京極氏・松平氏の代になってもこの区分は基本的に変わりません。

謎の中世港町「白潟」

2区(白潟本町・魚町東側)の調査

2区は松江大橋南詰の西側で、白潟本町と魚町を南北に貫く2本の通りの間にある街区に位置しています。この調査では中世の遺構・遺物が確認され、これまで文献史料などで存在が指摘されながらも実態が謎であった中世の港町「白潟」にせまる資料が得られました。最も古い遺構は15世紀前半のもので、遅くともこの頃には周辺で人が生活していたことがわかりました。また、16世紀後半には砂州の北端に大規模な石積みの護岸が築かれており、町の発展がうかがわれます。このほかにも多数の柱穴や鍛冶炉跡などが見つかり、中世白潟の一端を知ることができました。



白潟砂州に造られた中世の町

下層に「白潟砂州」と呼ばれる白い砂層が厚く堆積しており、その上に中世の遺構や黒褐色の遺物包含層があります。さらにその上層にある造成土は、堀尾氏の松江城下町建設のころに盛られたものと考えられ、江戸時代以降はかさ上げをして町が整備されたことがわかります。



15世紀前半の石積みの井戸跡

今回の発掘調査で見つかった最も古い遺構です。内部から鹿角や中国青磁の破片が出土しました。



川の浸食から町を守った護岸施設

16世紀後半の石積み護岸です。嫁ヶ島^{よめがしま}周辺で採取されたとみられる玄武岩が多用されており、長さ90cmもある大きな石も見られます。



17世紀前半の掘立柱建物跡

柱間が2間四方(一辺4.2m)の建物跡で、柱の沈下を防ぐため柱穴の底に大きな石を入れています。堂^{やぐら}か櫓^{やぐら}のような建物であったと考えられます。

宍道湖を埋め立てて拡大した江戸時代の町屋

1区(魚町西側)の調査

1区は、魚町西側の宍道湖に面した街区に位置しており、現在の魚町1～6番地の西側部分にあたります。調査の結果、17世紀前半以降に宍道湖を何度も繰り返し埋め立てて造成された町屋であることがわかりました。埋め立てた土砂が浸食されないように湖岸に大量の石を投入し、さらに宍道湖の波から屋敷地を保護するため護岸の石垣が強固に築かれていました。江戸時代の石垣や屋敷境の石列は現在の地番境とほぼ重なることから、当時の屋敷境が現在にまで引き継がれていることがわかります。石段や舟入が設けられた石垣もあり、この地が水運と密接に関わっていたことがうかがわれます。



①17世紀後半に築かれた直線的な石垣

1番地から5番地にかけて続けており、湖岸に向けて面をそろえています。この石垣は町ぐるみで計画して築かれた可能性があります。



②屋敷境で食い違う石垣

5番地(左)と6番地(右)に築かれた石垣です。1区では写真のように屋敷境で石垣が食い違う場合が多く、屋敷地ごとに土地造成や石垣構築をしていたと考えられます。



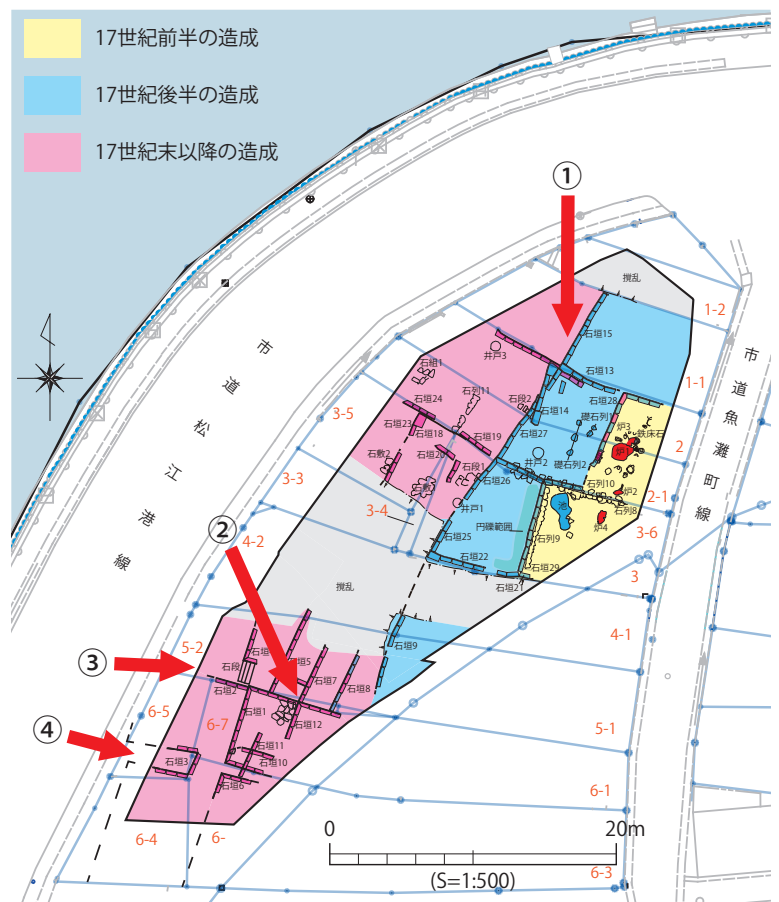
③石段を設けた石垣

湖岸に停泊した舟に乗降りするため石段が設けられました。



④舟入の石垣

幅1.6mで、湖岸からコの字形に入り組んだかたちをしており、波から舟を守る役割をしていました。



魚町の地番境と1区遺構配置図 (※赤数字は現在地番)

大橋川を埋め立てて造られた江戸時代後半の町屋

4A区・5区(和多見町)の調査

4A区と5区は、和多見町の大橋川に面した街区に位置しており、発掘調査の結果、18世紀中頃に大橋川を埋め立てて町屋を建設していたことが明らかとなりました。

江戸時代後半の町絵図には、調査地周辺には借家が建ち並んでいた様子が描かれており、多くの町人が暮らしていたことがうかがわれます。発掘調査では、建物基礎や屋敷境と考えられる石列が多数確認されており、町絵図に描かれていた町屋の景観を彷彿とさせます。



4A区・5区遠景(北西から)



4A区全景(真上から撮影、写真上が北)



1780年頃の和多見町絵図の一部(上が北)
(船杉ほか2009をもとに作成)



4A区の屋敷境の石列

町絵図(右上)を見ると、南側の道路に面した部分とその北側に借家が建ち並んでおり、その間には共用スペースとみられる空地があったことが見てとれます。4A区の発掘調査でも借家の建物基礎とみられる石列や空地が確認されました。

また、上の写真の赤矢印部分には、東に大海崎石、西に来待石という異なる石材を用いた石列がありました(左写真)。町絵図には、東に「新屋伝右衛門」の借家、西が「油屋孫左衛門」の借家が記されており、石列は両者の屋敷境にあたるものと考えられます。



5区の石列(西から)

南北方向にのびる石列が5条確認されました。絵図や文献史料には、造船小屋や借家にもなう納屋があったことが書かれており、これらに関する遺構の可能性もあります。

くらしを彩るさまざまな品

白潟地区の発掘調査では多種多様な遺物が出土しました。これらの品から町人たちのくらしぶりを見てみましょう。

盛り付ける・貯える・調理する



食事を盛り付けた碗・皿や、貯蔵用の甕、調理用の搦鉢などいろいろな種類の陶磁器が出土しました。肥前（佐賀県）や備前（岡山県）、瀬戸（愛知県）など様々な産地から運ばれてきました。

遊ぶ・祈る



神や動物、道具類をかたどったミニチュアの焼物で、おもちゃやお守りのようなものであったと考えられます。

(1 大黒、2・3 瓶、4 猫、5 灯籠、6 天神、7 碗形、8 釜、9 鍋、10 舟、11 牛、12 犬、13 鳥、14 亀)

灯す



油を入れた灯明皿やひょうそくに灯芯を立て、火を灯してあかりにしました。ひょうそくには灯芯を立てる突起があります。灯芯受皿は灯芯からしたたる油を受けるものです。灯芯押さえは、灯芯が油に浮かないように押さえる道具で、人物や布袋の形をしたものがあります。

(1 油徳利、2・3 灯明受皿、4 灯明皿、5・6 ひょうそく、7・8 灯芯押さえ)

商う



貨幣には銅銭や豆板銀があります。中世には中国銭や無文銭が使われましたが、江戸時代には寛永通宝が流通しました。豆板銀は、銀で取引をする際に重量調整のために用いられた小形の銀貨です。このほかに商取引で重さを量るために用いた分銅や、蔵の扉などにかけて錠を開けるための鍵も見つかりました。

(1 鍵、2 分銅、3 豆板銀、4・5 無文銭、6~8 中国銭、9・10 寛永通宝、11 宝永通宝(十文銭))

食べる



発掘調査では、食料残滓と考えられる動物、鳥類、魚類の骨や貝類がたくさん出土しました。シジミなど宍道湖でとれるものだけでなく、マダイやサザエなど日本海沿岸でとれるものも多く食べていたようです。

(1 サザエ、2 アワビ、3 ハマグリ、4 サルボウ、5 シジミ、6 鳥、7 スッポン、8 イノシシ、9 ブリ、10 マダイ、11 マグロ、12 フグ)



まとめ

大橋川南岸の砂州上に位置している白潟地区は水運の要衝で、松江城下町形成以前から町場が開かれていたといわれています。白潟本町や魚町東側の発掘調査ではそれを裏付けるように中世の遺構・遺物が確認され、当時の港町の一端が垣間見えました。江戸時代になると白潟本町や魚町東側だけでなく、魚町の西側や和多見町の北側でも大規模な埋め立てによって屋敷地が拡大しており、白潟町人たちの活発な経済活動を背景として町が発展していった様子がうかがわれます。

一方で、いつから白潟に人が住みはじめて、町ができていったのか、中世の港がどこにあったのか…など、まだまだ謎は尽きません。今後の調査で解明が期待されます。

白潟地区関係年表

| 時代 | 和暦 | 西暦 | 出来事 |
|------|---------|-------------------------------|---------------------------------|
| 南北朝 | 観応元 | 1350 | 白潟橋の戦い |
| | 応永 5 | 1398 | 『大山寺縁起絵巻』に「白潟橋」が描かれる |
| 中世 | | 15世紀前半頃 | 白潟砂州の北端に井戸が造られる（2区） |
| | 明応 4 | 1495 | 白潟に東西の町が存在 |
| | | 16世紀後半頃 | 白潟砂州の北端に石積み護岸が造られる（2区） |
| | 室 永禄 5 | 1562 | 『籌海図編』に白潟が記載 |
| | 〃 | 〃 | 毛利氏が出雲に侵攻し、白潟に放火 |
| | 町 永禄 9 | 1566 | 富田城開城、尼子氏が毛利氏に降伏 |
| | 永禄 12 | 1569 | 尼子勝久が出雲に入り、毛利氏から各所を奪い返す（尼子再興戦） |
| | 永禄 13 | 1570 | 毛利氏が白潟を制圧、三沢氏が白潟を支配する |
| | 天正 3 | 1575 | 九州の戦国武将島津家久が白潟を訪問 |
| | 天正 19 | 1591 | 吉川広家が白潟を支配する |
| 近世 | 慶長 5 | 1600 | 関ヶ原の戦後に堀尾氏が出雲に入国 |
| | 慶長 8 | 1603 | 徳川家康が江戸幕府を開く |
| | 慶長 12 | 1607 | 堀尾氏が松江城築城を開始、城下町建設が始まる |
| | 慶長 13 | 1608 | 初代松江大橋にあたる長さ約153mの木の橋が完成する |
| | 寛永 11 | 1634 | 京極忠高が松江藩主となる |
| | 寛永 15 | 1638 | 松平直政が松江藩主となる |
| | | 17世紀前半頃 | 魚町1～3番地が埋め立られ、屋敷地が造られる（1区） |
| | | 17世紀後半頃 | 魚町1～5番地の宍道湖側で直線的な石垣護岸が整備される（1区） |
| | 延宝 3 | 1675 | 白潟に船年寄と船差が設けられる（渡海場の整備） |
| | 延宝 4 | 1676 | 白潟で大火災が発生 |
| | 18世紀中頃 | 和多見町北側で大橋川の埋立て造成がおこなわれる（4・5区） | |
| 天明 8 | 1788 | 佐陀川の開削事業が完了、日本海と宍道湖が直接つながる | |
| 近現代 | 明治 明治元 | 1868 | 明治維新 |
| | 明治 明治23 | 1890 | ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）が松江に来る |
| | 大正 大正 3 | 1914 | 初代松江新大橋が完成 |
| | 昭和 昭和12 | 1937 | 現在の17代松江大橋が完成する |
| | 昭和 昭和47 | 1972 | 宍道湖大橋が開通する |
| | 昭和 昭和56 | 1981 | くにびき大橋が開通する |

